

# フィールドワーク「宗谷教育調査」の成果と課題

南部 初世

---

## 〈要 旨〉

本稿の目的は、名古屋大学教育学部教育経営学研究室が22年に渡り行ってきた教育研究活動「宗谷教育調査」の概要を紹介し、その積極的意義や教員・学生・大学のそれぞれに求められる配慮・努力についての検討を通じて、体験型学習の可能性と課題を検討することである。

まず、本教育研究活動の枠組みを提示した。これは、学部3年次以降の専門教育の一環として位置づけられ、演習(4単位)及び実習(2単位)から構成される。学生が主体となって現地調査を含む研究活動を計画・実施する。

次に、1年の活動を(1)ゼミ始動、(2)問題意識の深化と班編成、(3)課題設定と本調査の実施、(4)報告書の作成の4つに時期区分し、説明した。

最後に、本教育研究活動の成果と課題を提示した。成果としては、これまで学生のその後の生き方に大きな影響を及ぼしてきたこと、学生の研究力量が向上すること、また人間的にも成長することを挙げている。他方課題としては、調査受け入れ側との関係構築に配慮が求められること、近年の学生の変化に伴い調査の質に関わる問題が生じており、それへの対処が必要であることを指摘した。

---

## 1. はじめに

名古屋大学教育学部教育経営学研究室<sup>1)</sup>では、1992年以来毎年、北海道・宗谷地区においてフィールドワークを実施<sup>2)</sup>しており、我々はこれを「宗谷教育調査」と呼んでいる。この22年間に延べ433人、実人数でも248人がこの教育研究活動に参加し、多くの学生のその後の生き方に深く影響を与えてきたと自負している。「体験型学習の可能性と課題」と題する本特

集において、我々の教育研究活動の概要を紹介し、その積極的意義や教員・学生・大学のそれぞれに求められる配慮・努力についての検討を通じて、体験型学習の可能性と課題を検討することが、本稿に与えられた課題である。

## 2. 本教育研究活動の枠組み

### 2.1 教育課程上の位置づけ

本教育研究活動は、教育学部3年次以降の専門教育の一環に位置づけられ、学校教育情報コース（通称「第2コース」）<sup>3)</sup>専門科目の選択必修科目である「教育経営学演習Ⅰ・Ⅱ—地域教育経営の事例研究—」（前・後期金曜4限：植田・南部担当：各2単位）及び「教育経営学実習」（前期集中：植田・南部担当：2単位）として単位認定している。毎年調査内容が異なるため、3～4年次の2年間履修した場合もそれぞれ単位が認められ、教育経営学領域において卒業論文を作成する学生を中心に、2年に渡り本教育研究活動に参加する学生も多い。

これらの科目（通称「宗谷ゼミ」）は、教育経営学領域の教育課程において各論ゼミとして位置づけられる（図1）。

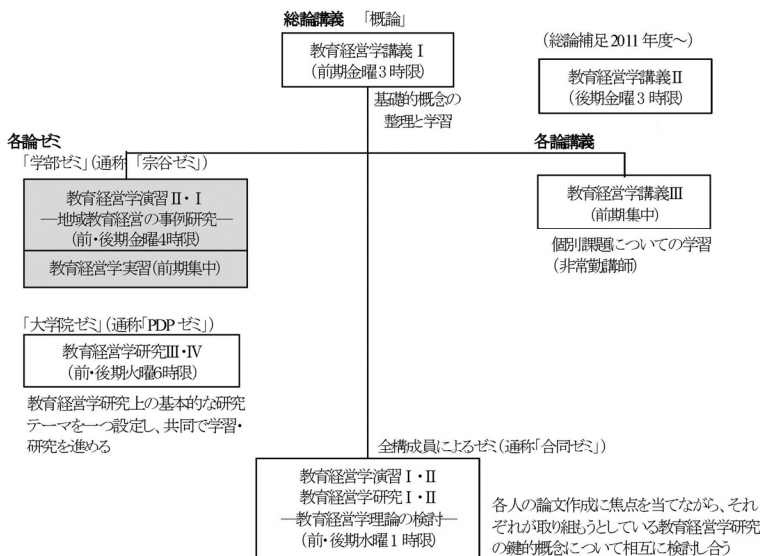


図1 教育経営学領域の教育課程

我々の領域においては、まず、総論講義として「教育経営学講義Ⅰ」（2年次以上）及びそれを補足する「教育経営学講義Ⅱ」（2年次以上）を毎年開講し、「各論講義」として集中講義形式の「教育経営学講義Ⅲ」をほぼ隔年で開講している。そして基幹ゼミとして「教育経営学演習Ⅰ・Ⅱ－教育経営学理論の検討－」（学部科目）及び「教育経営学研究Ⅰ・Ⅱ－教育経営学理論の検討－」（大学院科目）を置いている。これは、学部3年から大学院博士後期課程の学生が一堂に会し、教育経営学研究上の基礎的な概念について合同で学習・検討を行うゼミ（通称「合同ゼミ」）であり、近年はあまり見られなくなった学生が運営を行う特徴的なゼミである。このゼミでは、基本的には、個々人の関心に合わせて選択した文献の検討を行うが、4年生や修士課程2年生等、当該年度に論文執筆を予定している者については、問題意識・課題設定、研究方法、章構成・プロット等の検討を行っている。教員にとっても実質的な論文作成指導の場の一つであるため、植田もしくは南部の卒論指導学生はこのゼミを履修することになっている。

これに対し、各論ゼミ<sup>4)</sup>である「宗谷ゼミ」では、具体的な事例を通して地域教育経営について学ぶことになる。

## 2.2 シラバス（2013年度）

シラバスでは以下のように記載している。

### 2.2.1 演習

**【概要】** 父母や住民、教育行政関係者など地域の教育関係当事者が学校(教育)について合意を形成し、運営する地域教育経営の理論と具体的な実践事例について学ぶことを目的とする。北海道・宗谷地区における地域教育経営の事例について研究課題を設定し、調査及び分析を行う。本演習では、学生が主体となって現地調査を含めた研究活動を計画・実施する。

**【到達目標】** 受講者が共同して研究課題を設定し、調査を行い、その結果を分析する力量を形成する。

**【授業の内容】** 概ね次のように進める。

#### 前期

第1回           オリエンテーション：本演習の内容とスケジュール、運営等についての説明

第2～3回       過去の調査研究の蓄積についての学習：前年度調査の概

## 要

- 第 4～5 回 過去の調査研究の蓄積についての学習：過去の調査研究についての論点整理
- 第 6～8 回 調査課題と対象・方法の設定：各自の問題意識の明確化、問題意識のグルーピングと班編成
- 第 9～12 回 調査課題と対象・方法の設定：班による調査課題・対象・方法の検討
- 第 13～15 回 調査計画の立案：調査項目の検討
- 後期**
- 第 1 回 オリエンテーション：本演習の内容とスケジュール、運営等について説明
- 第 2 回 調査結果の整理と分析：調査データの整理
- 第 3～4 回 調査結果の整理と分析：調査データの分析
- 第 5～7 回 論文構成の検討と執筆：論文構成の検討／報告書構成の検討：全体構成の検討
- 第 8～11 回 論文構成の検討と執筆：論文の執筆と検討
- 第 12～14 回 報告書の作成：報告書全体の検討
- 第 15 回 総括：前期・後期の総括を実施

【教科書】 使用しない。

【参考書・参考資料】 名古屋大学教育学部教育経営学研究室『宗谷教育調査報告書（第一次～第五次）』（1993～1997 年）、同『地域教育経営に学ぶ（創刊号～第十五号）』（1999～2013 年）

【成績評価方法】 演習への参加状況と、各人の報告内容にもとづいて総合評価する。GPA の運用にあたっては「教育学部における『履修取り下げ』制度の運用ルール」に従う。

【履修条件】 原則として、教育経営学演習Ⅱ・Ⅰ（前・後期）を通し、教育経営学実習（前期集中）と合わせて履修すること。

【その他の注意】 授業時間以外にも様々な活動がある。

## 2.2.2 実習

【概要】 地域教育経営の実践事例について現地でフィールドワークを行い、教育経営学的な観点から分析・検討を行う。本年度も、北海道宗谷管区における具体的な地域教育経営の実践事例を対象として、特に学校レベルに焦点をあてて、教育経営の在り方について聞き取りやアンケート

ト調査などを行う予定である。本実習では、学生が主体となって、現地調査を計画・実施する。現地調査は一週間ほどのものであるが、教育経営学演習Ⅱ・Ⅰにおいて準備を重ね、また、まとめを行うという形態で行われる。

【到達目標】 受講者が共同して研究課題を設定し、調査を行い、その結果を分析する力量を形成する。

【成績評価方法】 年度末に調査のまとめとなる報告書(『地域教育経営に学ぶ』)を作成するので、各自の執筆部分と実習への参加状況について総合評価する。

【履修条件】 教育経営学演習Ⅱ及びⅠを履修すること。

### 3. 本教育研究活動の1年(2013年度)

#### 3.1 ゼミ始動(4月からゴールデンウィークまで)

##### 3.1.1 組織づくり

シラバスにあるように、宗谷ゼミでは「学生が主体となって現地調査を含めた研究活動を計画・実施する」ことから、まず、年度初めに昨年度のゼミに参加した学生(主として新4年生<sup>5)</sup>)が集まり、ゼミへの参加も含め、新たな運営体制について協議する。ここではそれぞれが率直に自らの進路の問題を含め、抱えている問題やゼミに対する考えを語り合う。この手続きはその年度のゼミ運営に関わって非常に重要であり、ゼミ活動の質を左右する。この時期彼らの最大の関心事は、当然進路の問題であり、それは大学院進学、教員、公務員、民間企業と多様である。それぞれの試験や就職活動の時期がずれていることをうまく使いながら、個々人の特性をお互いに見極めつつ、新たな運営体制を組んでいく。

##### 3.1.2 オリエンテーション

初回(4月12日)のオリエンテーションは、4年生にとって緊張の場となる。自らゼミを取り仕切り、新たにゼミに参加することになるかもしれない3年生に対し、ゼミの内容について説明するためである。事前に4年生で検討・作成したレジュメとパワーポイントを用いつつ、ゼミの概要、1年の流れ、ゼミの運営組織、メーリングリスト、教育経営学資料室の使い方等について説明していく。学生ならではの視点から、なぜ宗谷に行くのか、本調査とは何か、他のゼミと何が違うのか等、新たな仲間が率直に知

りたいと思う内容が盛り込まれている。

この日に学生は互いに自らの問題関心とともに、自己紹介を行う。第2コースに分属している3年生は、前年度後期の学校教育情報演習（通称「2コースゼミ」）<sup>6)</sup>において一度は自らの問題意識をもとに発表を行い、レポートを作成しているが、あらためて問われると、それが本当に自分の追究したいテーマなのか自信を持ってなくなるようである。しかし、A4用紙半分～1枚程度で文章化して10日後に提出するよう求められ、その後、それを基に宗谷の教育課題とすり合わせつつ、調査のための班編成が行われるため、学生は自らのテーマに向き合い始めることとなる。

### 3.1.3 基礎学習と運営体制の整備

第2回（4月19日）には、前回出席者のほとんどが参加し、今年度のゼミ構成員は、スタッフ2名、TA1名（M2）、4年生8名（7月以降、帰国学生2名が加わり10名となる）、3年生10名、2年生1名、M1生1名となった。この日は、まず宗谷管区の概要と、稚内市の学校及び各地区の状況について説明があり、その後、昨年度の調査について各班から報告が行われた。班を編成し、「共同研究」としての課題を設定し、調査を実施して報告書を作成する1年のプロセスを昨年度参加者が紹介したが、そこでは自分たちにとって何が難しかったのかが率直に語られた。

これと併せて、ゴールデンウィークに行われる学習会と、今年度の宗谷の教育課題を把握するため、本調査に先立って少人数で実施される予備調査（6月）について協議された。

既述のように、このゼミは学生自身が運営し、1週間に及ぶ調査を計画・実行し、報告書を作成するものである。調査研究内容を詰めていくだけでなく、設定した課題を解明するために、どのような調査が必要であるのかを考え、その実現に必要な事務的業務もこなし、こうした調査研究活動全体の運営そのものを学生が行っている。そのため、毎回のゼミには、調査内容に関わる事項だけでなく、事務的な事項も含めて検討される。

ゼミ構成員で協議して決定し、それを実施していくには、メーリングリストを最大限活用したとしても、週1日1コマの時間ではとても間に合わない。そのため学生は、金曜4時限の「本ゼミ」以外に「サブゼミ」の時間を設けているが、本年度は日程調整の結果、火曜日の昼休みに決定し、4月23日から開始されることとなった。

この日のサブゼミで前期の係が決定され、今年度は、ゼミ運営を行う「運

営部」、宗谷への移動・宿泊業務を扱う「旅行部」、宗谷の方との交流の窓口となり、ゼミの広報活動を行う「広報部」の三部体制となった。運営部には、調査対象との連絡窓口となる渉外係、会計係、資料・電子データ・音声データの整理・保管と物品管理を扱う環境係が、旅行部には、宿泊係、飛行機係、レンタカー係、保険係、しおり係の他、調査に使用する備品のチェックと送付を担当する備品係が置かれ、それぞれ担当者が決まった。

第3回（4月26日）には、学校が保護者・地域住民との「共同」において教育を行うという「宗谷の教育」の基盤を形づくることとなった「宗谷の教育合意運動」と「子育て運動」について、小グループに分かれて学習を行った。4年生があらかじめ準備したレジュメに沿って報告し、質疑を行い、その後全体で、その討議内容を交流するという形で進められた。

ゴールデンウィークの最終日（5月6日）には、毎年恒例の学習会及び懇親会が行われた。今年は、問題意識の交流に重点が置かれ、午前・午後各1コマを割いて一人ひとり問題意識の報告と質疑を行い、その後、小グループに分かれて、あらかじめ関心を持って読んできた『地域教育経営に学ぶ』に掲載されている論文について意見交換が行われた。

## 3.2 問題意識の深化と班編成（7月中旬まで）

### 3.2.1 調査受け入れ側からのトピックス提供

これまでの21年間、学生の問題意識から班編成を行い、そこで調査課題を練り上げていくという方法をとってきたが、今年度は新たな試みとして、調査受け入れ側からもその教育の実態に即したトピックスをいくつか提起してもらい、学生の問題意識と併せて検討し、課題を設定するという方法を採用入れることとなった。これは、2012年秋に調査受け入れ側から発案され、我々スタッフとの間で数度に渡り協議を行い、決定したことであった。そして4月30日に、(i) 宗谷中学校の産業教育、(ii) 天北小中学校の小中一貫教育の取り組み、(iii) 西小中学校の学校づくりと地域づくり、(iv) 東地区・北地区・潮見が丘地区のネットワークという4つのトピックスが、今年現地でも注目されているという情報提供を受けた。

5月10日のゼミから早速、これらについて学習を開始した。便宜的に4つの班に分かれ、過去の報告書やインタビューデータ、文献、各校のHP等に当たり、疑問点を互いに出し合いつつ理解を深めていった。こうした班ごとの会合を我々は「分科会」と呼んでおり、5月中は事務連絡（この時期は、予備調査の準備、夏合宿の日程決定と宿泊先確保、本調査の日程

設定、今年度より新たに設けられた広報部の活動内容の検討等が必要)の後、この分科会を行い、最後に全体で交流するというスタイルで進め、5月31日のゼミでは、問題意識を文章化するとともに疑問点を提示し、それについて検討を行った。

### 3.2.2 暫定的班編成と予備調査の渉外

予備調査まで2週間に迫り、渉外を開始するためにも、暫定的に班編成を行うこととなった。そして (i) 産業教育、キャリア教育に着目し、宗谷中学校の学校づくりを見たいと考えている班、(ii) 子どもの9年間の成長を見据えた小中一貫教育の取り組みとして天北小中学校を見たいと考えている班、(iii) 学校統廃合問題への取り組みとして西小中学校を見たいと考えている班、(iv) 地域のネットワーク形成に関心を持っている班の4班が編成されたが、これは調査受け入れ側からの提案に即したものであった。サブゼミを利用して各班の問題意識をより鮮明にするとともに、予備調査対象候補を挙げ、彼らに対するインタビューの柱を立てていった。

これまででは、調査対象者にスタッフから電話もしくはメールで調査を依頼し、その後学生が具体的な日時を先方と相談して決める方式をとっていた。しかし、調査受け入れ側の要望もあり、今年度から渉外窓口をスタッフに一元化して、課題意識とインタビューの柱を記載した依頼文書を先方に送る方式へと変更することになっていた。そのため6月11日にメールで文書を送付し、具体的訪問日時についてもスタッフが打ち合わせを行った。その際、調査受け入れ側の提案により、教育委員会や教育研究所等の行政関係者については学校教育課長、個々の学校については校長会を通して、各調査対象者に依頼文書を配信してもらった。

### 3.2.3 予備調査の実施

スタッフ2名の他、3年生2名、4年生3名、M1生1名で、6月17～19日に予備調査を実施した。今年から名古屋-稚内便がなくなり、羽田経由となったため、2泊3日を日程として確保しても、調査は初日の16時から3日目の12時までとなる。宿泊先の稚内市少年自然の家から教育委員会のある市役所まで8km、そこから宗谷中学校までは東に25km、天北小中学校までは南に36kmの距離があり、調査対象者の都合もあるため、できるだけ効率よく回れるようスケジュールを組み、今年は、10件の調査及び協議(スタッフのみ参加)を行った。インタビューの柱は以下の通りである。



- ① 稚内市教育相談所長（6月17日16:00～17:00、稚内市教育相談所）
  - (iv) 班：北・東・潮見が丘地区ネットワークを教育相談所では全市の観点からいかに捉えているのか。
- ② 今後の「宗谷教育調査」のあり方について、名古屋大学スタッフと稚内市教育相談所長、稚内市校長会長（稚内市立宗谷中学校長）、宗谷教職員組合委員長との間で協議（6月17日17:00～18:00、稚内市教育相談所）。
- ③ 宗谷教職員組合委員長（6月17日18:30～19:30、るぱん）
  - (i) 班：稚内市において「学力」をどのように捉えているのか。
  - (ii) 班：天北小中学校の小中一貫教育の特色をどのように把握し、教育研究所の所報でとりあげるようになったのか。
  - (iii) 班：稚内西小中学校のような小規模学校を擁する地域に学校が存在する意味、学校が地域に果たすべき役割をどのように把握しているのか。
  - (iv) 班：北・東・潮見が丘地区において形成されたネットワークをどのように捉えているのか。
- ④ 稚内市立天北小中学校長（6月18日9:00～10:00、天北小中学校）
  - (ii) 班：現在天北小中学校でどのような小中一貫教育の取り組みを行っているのか、またどのように地域を捉えているのか。
- ⑤ 稚内市立稚内西小中学校長（6月18日11:00～12:00、稚内西小中学校）
  - (iii) 班：学校と地域との連携を図るために、現在稚内西小中学校ではどのような取り組みを行っているのか、また学校が地域に果たす役割をどう捉えているのか。
- ⑥ 稚内市立宗谷中学校長（6月18日13:30～14:30、宗谷中学校）
  - (i) 班：現在宗谷中学校では、社会で生きていくために必要な力の育成を見据え、どのような教育活動が行われているのか。
- ⑦ 稚内市教育研究所長（6月18日15:00～16:00、市役所）
  - (ii) 班：教育研究所として、天北小中学校の小中一貫教育の特色をどのように捉えているのか。
- ⑧ 稚内市教育委員会教育長（6月18日16:00～17:00、市役所）
  - (i) 班：稚内市において「学力」をどのように捉えているのか、また宗谷中を産業教育実践指定校とした背景について。
  - (iii) 班：教育行政は、稚内西小中学校のような小規模学校の存在をどう捉え、どのような支援的な教育条件整備を行っているのか。

か。

- ⑨ 稚内市教育委員会前教育長（6月19日 9:00～10:00、自宅）
  - (i) 班：③と同じ。
  - (iii) 班：⑧と同じ。
  - (iv) 班：③と同じ。
- ⑩ 稚内北星学園大学教授(元宗谷中学校教頭)（6月19日 10:30～11:30、稚内北星学園大学）
  - (i) 班：宗谷中学校教頭時代に、産業教育と総合学習に力点を置きつつ、どのような教育活動の全体像を描こうとしたのか。

限られた時間ではあるが、宗谷の教育の中心的担い手に直接今年の状況聞き、また、本調査に向け多くの有益な助言を得ることができた。

### 3.2.4 班編成

予備調査から戻った直後の6月21日には、分担を決めインタビュー起こしに着手した。そして6月28日にはその報告が行われ、予備調査の成果を全員で共有した。これを基に、7月2日（サブゼミ）、5日、9日（サブゼミ）を使い、個人の問題意識も加味しつつ、これまで教育実習のため班編成時に不在であった学生と留学から戻った学生を加え、あらためて班編成が行われた。その結果、子どもたちが主体的に学び、社会で自立して生きていくために必要な力を保障する教育活動とはどのようなものを考察したいとする「学力保障班」があらたに形成され、(i) 産業教育班（3年生2名、4年生2名）、(ii) 天北班（後に「学校づくりと地域班」に班名変更、3年生3名、4年生3名）、(iii) 地域変動と学校班（2年生1名、3年生1名、4年生1名、M1生1名）、(iv) ネットワーク班（3年生2名、4年生2名）、(v) 学力保障班（3年生2名、4年生2名）の5班編成となった。

## 3.3 課題設定と本調査の実施（9月初旬まで）

### 3.3.1 調査課題及び調査対象候補の検討

ようやく班編成が確定し、本調査までの約1か月で、調査課題を確定し、調査対象候補を決定して渉外を行い、具体的な調査項目を作成して送付しなければならず、まさに時間との戦いになってくる。前期試験期間後も集中講義、インターンシップ実習等続き、学生も非常に多忙であり、時間をやりくりして、事務的業務を含め<sup>7)</sup>、本調査の準備を行うことになる。

7月19日と26日の2回に分け、5班分の問題意識と課題設定、調査対象とインタビューの柱について検討を行ったが、ほとんどの班の内容がまだ茫漠としたものであり、調査対象とインタビューの柱を提示できない班もあった。本ゼミの時間にこうした検討会を設けるため、学生たちは互いに予定を調整した時間外の分科会でレジュメ作成等の準備を行う。検討会での指摘を受けて、再び分科会で話し合い、場合によってはそれぞれ「宿題」を持ち帰り、次の分科会で「前回のまとめ」レジュメを作成する。試験もほぼ終了した8月2日には、10時から3時間かけてこの「まとめ」を検討した。その後、上記のサイクルによって内容をさらに詰めていく。

### 3.3.2 調査課題及び調査対象の確定と渉外

調査受け入れ窓口<sup>8)</sup>とは常に連絡をとり合い、ゼミの進捗状況を伝えていたが、7月末日までに調査対象候補を確定するよう依頼があった。そのため、現段階での希望として一覧（学校関係者、行政関係者、地域住民等の3つのカテゴリーが存在）を送付したところ、早速検討を行い、学校関係者については稚内市校長会長が、翌日の宗谷管内校長研修会時に関係者にお声掛けくださった。また、面識のない地域住民への調査依頼方法についても一つひとつ検討し、声をかける最適のルートをご助言くださった。その後、札幌や旭川等管区外への転出者、礼文島・利尻島への異動者、調査辞退者等の連絡があり、また地域住民への仲介者の紹介を受け、調査が刻一刻近づいているのを自覚し、大きな期待が膨らむ一方で、不安も感じ、緊張感が高まっていった。

そのような中、8月5～7日にひるがの高原で夏合宿が行われた。合宿形式で集中的に調査課題及び具体的調査項目について検討を行うことが第一の目的であるが、本調査の予行演習としての意味合いも含んでいる。つまり、調査に必要な備品を準備し、車に分乗して安全運転で目的地まで移動し、寝食を共にするという集団行動の経験に、学生は案外慣れていないのである。夏合宿では、宿舎到着直後から深夜に及ぶまで分科会を行い、翌日は全体で検討し、再び分科会で調査項目を練り直した。

合宿後本調査出発までに、8月9日、15日、19日の3回の検討会を経て、調査課題を確定し、調査項目の形を整えていくというテンポで進めたが、インタビューの柱については、事前に送付する依頼文書に記載する必要があり、14日までに確定することとなった。そして20日までに58件の植田・南部名の「教育経営学実習に係る調査へのご協力のお願い」と、同数の学

部長決済済みの「教育経営学実習について（依頼）」を作成し、送付した。その後、調査の承諾が得られたところに対し、順次学生が電話連絡をして、訪問日時を打ち合わせた。

### 3.3.3 本調査の実施

数か所を除き調査日時を確定することができ、8月26日総勢25名で本調査に出発した。午後便で中部国際空港から新千歳空港に飛び、5台のレンタカーに分乗して札幌に向かい、一泊して翌日320kmの行程を経て夕刻に宿泊先である稚内市少年自然の家に着した。この施設は、市外の大学生・引率者である我々も宿泊代・朝食代ともに500円という低価格で利用できるが、「少年の健全な育成を図る」目的で設置された施設の性質上、門限や入浴時間、鍵の管理方法等、生活上の制約もまた伴うため、それに留意しつつ、8泊9日を過ごすことになる。

翌日からは、各班それぞれが先方と約束した時間に遅れないようレンタカーで調査場所に向かうが、スタッフ2名とTAも分かれてそれに同行する。調査の合間に昼食をとるが、コンビニエンスストアで買い物をして、車の中で食べることもしばしばで、夕食は外食か、スーパーの弁当・総菜を買って入浴時間に間に合うよう宿舎に戻る。空き時間には分科会を行い、録音したインタビューを聞き直し、まとめを作成して、インタビュー項目をさらに練って、次の調査に備える。1日の終わりには全体会を行い、その日の調査内容を報告し合うとともに、翌日の調査と配車予定や集団生活上の問題も含め、事務連絡が行われる。

本年度の調査は、表1の通り行われた。

各班多くの研究成果と、調査にご協力いただいた方の温かい気持ち、教育に対する熱い想いを胸に、9月4日無事に帰途についた。

フィールドワーク「宗谷教育調査」の成果と課題

表 1 本調査日程表

	産業教育班	地域変動と学校班	ネットワーク班	学力保障班	学校づくりと地域班
8月28日 木	午前 宗谷中校長 9:40～@宗谷中	西地区富士見町内会長 10:00～@宗谷パレス	中央小教頭 9:00～@中央小	G教諭(研究部長) 9:00～@稚中	稚中校長(元天北小中開校準備委員、元天北小中教頭) 10:00～@稚中
	A教諭10:40～@宗谷中		稚中校長11:00～@稚中		
	B教諭11:40～@宗谷中				
午後	宗谷中教頭13:00～@宗谷中		中央小校長 13:00～@中央小	中央小教頭 13:00～@中央小	中央小校長(元天北小中校長) 13:00～@中央小
	a氏14:00～@宗谷中		北地区民生児童委員 g氏、 h氏14:00～@稚中	中央小校長 14:00～@中央小	教育研究所長(元上声開小教諭) 15:00～16:00@稚内 総合文化センター
	宗谷中生徒4名 15:50～@宗谷中			潮見小校長(元稚中校長) 16:00～@潮見小	
	b氏、c氏 16:30～@宗谷中			潮見小校長 17:00～@潮見小	
			H教諭18:00～@稚中		
8月29日 木	C教諭9:40～@宗谷中	教育長 9:00～@稚内市役所			
	D教諭10:40～@宗谷中	学校教育課長 11:15～@稚内市役所	教育部長 9:45～@稚内市役所		天北小中校長・教頭 10:00～11:00@天北小中
	E教諭11:40～@宗谷中		こども課長 10:30～@稚内市役所		
	午後 d氏13:00～@宗谷漁協		学校給食課長 15:00～@稚内市役所	G教諭(校内研修発表) 15:30～@豊富中	東小校長(元天北小中校長) 13:00～@東小 1氏(元開校準備委員) 15:30～16:30@稚内市役所
8月30日 金	稚内北星学園大学教授(元宗谷中教頭) 10:00～@稚内北星学園大学	教育相談所所長、SSW 適応指導教室室長 9:00～@稚内市教育相談所		授業参観 10:00～@稚中 保護者 j氏 11:00～@稚中	港小校長(元開校準備委員) 10:00～11:00@港小
	午後	西小中教諭 13:00～@西小中	中央地区民生児童委員 i氏 14:00～@稚中	1年生代表 昼食・13時～@稚中	安全育成センター所長(元開校準備委員会) 13:00～@市役所
		西小中教頭14:30～@西小中	F教諭15:00～@稚中	生徒会代表16:00～@稚中	
		西小中校長17:00～@西小中		I教諭17:00～@稚中 J教諭18:00～@稚中	m氏(元開校準備委員) 19:00～@宗谷教育会館
8月31日 土	午前	大畑小校長、e氏、f氏 11:00～@下勇知集落センター			
	午後	浜頓別小校長 15:00～@自然の家 港小(元下勇知小中) 教諭 16:30～17:50@自宅			
		座談会18:00～20:00@稚内海員会館			
9月1日 日	午前	西小中PTA会長10:00～@富士見児童会館			
	午後	西地区豊浜町内会長13:30～15:00@稚内西小中			
9月2日 月	午前	授業見学 @宗谷中	南小校長・教頭 10:00～@稚内南小	2年生代表昼食～@稚中	n氏(元曲淵小中校長) 10:00～11:00@自然の家
	午後		教育委員長 13:30～14:30@自宅	K教諭 13:40～@稚中	
		増幌小教頭 16:00～@増幌小		L教諭 16:00～@稚中	増幌小教頭(元開校準備委員) 16:00～@増幌小
				M教諭 17:00～@稚中 保護者 k氏18:00～@稚中	地域住民(o氏、p氏、q氏、r氏、s氏、t氏、u氏) 19:30～21:00@天北小中
9月3日 火	午前	稚内南中校長・教頭 9:00～@稚内南中		授業参観 11:00～@稚中	
	午後	稚内南小教諭 11:00～12:00@稚内南小		稚中教頭 昼食時～@稚中	
		元下勇知小中校長 13:30～@宗谷友の会事務所			
		懇親会18:00～@ろばん			

### 3.4 報告書の作成（3月まで）

#### 3.4.1 後期運営体制づくりと調査データの整理

帰名2日後、宗谷から送り返した備品を受け取って開梱し、週明けの9日には、早速インタビュー起こしの分担を行った。10月第1週までに各自音声データの担当箇所を聞き直して文字に起こすことになるが、この時期併せて、調査協力の礼状とゼミニュースを送付する。そして9月27日には、前期のゼミ総括が行われ、事前に実施したアンケートに基づき、1. 運営体制、2. 座談会・懇親会、3. 班編成、4. 検討会・本ゼミについて、成果と課題が議論された。

これを踏まえ、後期授業初回の10月4日には、3年生を主力とする後期の運営体制が組まれた。報告書の編集を統括し、具体的には各班の論文や企画ページの進捗状況を確認し、本ゼミの日程や活動を運営委員会に提案する「編集部」と、宗谷の方や二年生等への情報発信を行い、具体的にはゼミニュースやパンフレット、HP作成を担う「広報部」の二部体制とし、その上に、「各部会の情報共有のほか、活動の進捗状況を把握し、本ゼミの活動内容を相談する」運営委員会を置くとされた。運営委員会は、両部長、運営委員長、副委員長、その他有志から構成される。初回のゼミではこの他、今後の論文作成のテンポと予定について確認が行われた。

#### 3.4.2 プロット作成と原稿の執筆

インタビュー起こしも一段落した10月11日及び18日には、分科会において調査のまとめを共有し、章立て・プロット作成に向けて話し合われた。その後25日と11月1日の2回に分けて、第1回「章立て・プロット」検討会が行われ、それを受けて、8日には各班から前回のまとめが提出された。再度それを検討し、15日の分科会を経て、22日と29日に第2回検討会が行われ、文章化を進めていった。

その後、12月13日と20日の2回に分けて、第1回「論文」検討会が、1月6日に第2回検討会が行われ、5班の論文が出揃った。10日にはさらなる検討を行い、連休明けの15日に調査対象者に論文を送付した。これは、事実関係やこちらの解釈に誤りがないか、本人に内容を確認してもらうためである。その後、月末までにチェック済みの論文を返送してもらい、調査対象者からの指摘・助言を基に、論文を完成させる。

### 3.4.3 企画の編集

こうした論文作成プロセスと並行して、学生は報告書の「企画」及び「特集」の編集に取り組む。サブゼミを活用し、編集部が中心となって内容を詰めていくが、今年は特に、「宗谷との新たな関係」や「研究成果の宗谷への還元」を模索してきた1年であったため、学生がこれを特集のテーマとして選択したのは、自然な流れであった。

また、恒例となった「寄稿」についても、その趣旨や執筆者について10月から徐々に絞り込み、11月5日に決定して21日にゼミニュースと共に依頼状を送付した。1月末日の原稿到着を学生は楽しみにしている。

### 3.4.4 刊行

論文と特集・企画等、報告書の内容が最終的に確定したら、次は校正である。分担して複数で入念にチェックを行い、それらをプリントアウトして、担当者が印刷所に持ち込む。それが概ね2月末である。初校が出たら分担してチェックし、戻した後は仕上がりを待つばかりとなる。

3月中旬に仕上がる報告書は、調査対象者・関係者をはじめ、全国の図書館に送付される。そして4年生は、名古屋大学卒業式の日に行われる恒例の研究室歓送会において、「研究室卒業証書」とともにこの報告書を手渡され、社会へと巣立っていく。

## 4. 本教育研究活動の成果と課題

以上、本教育研究活動の枠組みと1年のプロセスについて述べてきた。こうした今年度の取り組みは、これまでの21年間の活動を基盤として成り立っている。本教育研究活動は、その時々々の宗谷の教育をめぐる状況とこちらの学生の実態との相互作用によって形づくられ、その到達点と課題は年毎に異なるものとなる。

### 4.1 成果

これまで様々な困難に直面しつつも、その時々にとりうる最善の形を模索し、研究活動としての一定の成果と、教育活動としての計り知れない意義を生み出してきた。前者については、これまで刊行してきた20冊の報告書をご参照願いたい。後者については、まずは、学生自身の言葉を紹介したい。

#### 4.1.1 学生の生き方への影響

「大学生でいられた4年間、それは特別な時間だったと今思う。本当に濃密な時間だった。私はこの4年間に、それまで過ごしてきた18年分よりも多くのことを学んだ。受験に勝つためだけでなく、自分が納得するための勉強がどれほど難しく苦しいことなのか、そしてどれほど大切なのかを肌で感じた。…この4年間に私が学んだ最大の真理は、自分の頭で考え、自分の体で動く、その当たり前の大切さだった。私は3年生の時から2年間にわたりあるゼミに参加してきた。現地調査を伴う2年間のゼミの活動を通し、私は教科書だけでは決して学ぶことのできなかったものを得たと思う。教師を志す私にとって、実際の教育現場に赴き、『価値ある本物』の教育実践を実感できた経験は、これからもずっと大きな財産として心に焼きついていくことだろう。また、ゼミを通して、たくさんのかけがえのない人たちに出会うことができた。一つの目標に向け、何度となく議論を重ねることの難しさを知り、それができる仲間の大切さを知った。…」<sup>9)</sup>。これは、現在教師として活躍している卒業生の手記である。

「…教育委員会なので、保護者からのクレームや体罰自殺の事件、それに対する行政や現場の対応を直に見ているわけですが、正直これではだめだな…と思うことがよくあります。…学校（現場）と行政が、子どもたちのためにうまく機能し合っているようには思えません。…今年も学生のみんなは、鳥肌がたって、目の奥が熱くなるような宗谷の先生方の言葉を聞くことだと思います。それは本を読んだり、インタビュー起こしを読んだりすることとはまったくちがう経験だと思います。目の前にいる自分たちに向かって、発せられた言葉と言うのは本当に貴重で重いものですね。だから、それをうけとることができた者として、感謝をこめて形にするんですね。宗谷ゼミをやっている最中は大変でしたが、やはり今思い返してみると、本当に他のどんな人よりも好きなことを思いっきりやれた充実した最高の大学生活だったと思います。…」。これは、教育委員会に務めている卒業生から我々が受け取った手紙である。

しかし、本教育研究活動から大きな影響を受けたのは、教育に関わる職に就いた者だけではない。「…ひとつの言葉について、その捉え方から、使い方まで、集団で何度も話し合っていた去年までとは真逆の毎日です。…でもこのような180°違う環境でも支えになっているのは、宗谷ゼミでの2年間だと、心から実感しています。仲間と話し合って、夜遅くまで議論して、時にはぶつかって、泣いて、笑って。『答え』なんてなくて、その自分



たちなりの『答え』を明らかにするために、自分の感情や考えを素直に出せる環境ってすごく人生の中で貴重なんだって、社会に出てからわかりました。宗谷ゼミ、真剣に取り組むほどしんどい時もあります。どうして伝わらないんだろう？自分たちは何が明らかにしたいんだろう？…でも、そうやってもがいているうちに、自分のこだわりが見えるし、仲間のことがわかり、また絆も深まります。このもがきは、大学生の今じゃないと経験できない、貴重な経験で、このしんどさは、幸せなしんどさであるということ、今痛感しています。私は大学生の時にこの幸せなしんどさをいっぱいいっぱい味わったからこそ、大切な仲間と、『いましんどくっても自分のなりたい姿になれるまであきらめない』という信念を持てているのだと思います。…」。現在は金融機関に務める卒業生からの手紙である。

本教育研究活動に参加し、大変な苦境の中教育に携わる人々の真摯な姿を見て、学生は卒業後どのように生きていきたいのかをあらためて自らに問う。ある者は、教師として日々子どもの成長に関わっていくことを決意し、ある者は、行政職として地域の人々のために働くという将来像を描き、またある者は、出版や情報等の教育関連企業で外側から教育をバックアップできないかと考え、自らの進路を選び取っていく。

#### 4.1.2 学生の研究力量の向上

本教育研究活動によって、学生の研究力量がいかに向上したのかは、4年間の学修の集大成である卒業論文の作成過程に表れる。指導教員として、① 2年間宗谷ゼミを履修する学生、② 3年次のみ履修した学生、③ まったく履修しなかった学生を担当することになるが、着任以来15年間で①が最多であった。しかしながら、②が多い年も数回あり、③は2人であった。

既述のように、宗谷ゼミでは自らの問題関心を研究テーマとして発展させ、徐々に課題意識を明確にし、共同で課題設定を行う。3年次のはじめに学生が提示したもとの問題関心の中には、宗谷の教育を素材として研究するにはあまり適さないものもある。たとえば、「美術館のあり方」や「受験に特化した高校教育」などである。これらについては、そのトピックスで何を問いたいのかを考えさせ、併せて宗谷の教育の基本的な特徴の学習を進めていく。それにより、課題意識がより鮮明になり、調査対象等を工夫することで対応できる場合があり、また、宗谷ゼミでの研究テーマとしてより適切で、自分も関心を持てるものへと移行していく場合もある。そうしたプロセスを経験しているため、3年次の年度末に提出する卒論指

導教員希望調査<sup>10)</sup>も十分に記述することができ、4月下旬の卒論題目提出のための合同ゼミでの検討も実質的な中身を伴うものとなっている。

さらに本調査に入るまでの4か月間、常に研究課題に向き合うことになる宗谷ゼミ履修の4年生と、それ以外の4年生とではおのずから学習時間が異なってくる。また、他の学生と常に議論する環境にあるため、新たな視点を得たり、自分の考えを深めることにもなる。もちろん、直接宗谷の事例で卒論を執筆する学生ばかりではなく、特に今年は、植田もしくは南部の指導学生7名のうち5名が別の素材を扱ったが、その卒論の着想や調査の手法等には、宗谷ゼミで培った力が活かされている。

こうした力は、実際に卒論を執筆する段階でも遺憾なく発揮されることになる。昨年度報告書を執筆しているため、論文とはどういうものであるかを概ね理解できており、章立て・プロットを作成して、肉づけする形で論文化していくことも知っている。そのため、合同ゼミの論文構成の検討の場で、「研究課題」と「学習課題」が異なることや、単なる調査結果を並べただけで論文にならないことを指摘しても、彼らは自分の報告内容に照らして我々が何を問題にしているのかの概要を理解することができる。執筆段階に入り初稿を検討して、論旨の通らないところや内容がよくわからないところ、素材の整理の仕方に問題がある点を指摘すると、彼らは書き直して1週間とは経たずに再稿を持ってくる。それをさらに検討して、大体3次稿が提出原稿となる。論文を書く楽しさ、そして書き上げた時の達成感・充実感を知っているからこそ、最後まで集中して頑張るのである。

#### 4.1.3 学生の人間的成長

1年のプロセスを経て、学生は研究力量が向上するだけでなく、人間的にも大きく成長する。毎年の報告書には「みんなのことば」というコーナーが設けられ、調査参加者一人ひとりがこの1年を振り返り、調査とゼミへの想いをそれぞれの言葉で綴る。そこからは、学生が本教育研究活動をどのように捉えていたのか、また、どのような課題を抱え、それをいかに乗り越えたのかを読み取ることができる。

年度当初4年生は、新たにゼミに加わった3年生が理解しやすいよう様々な運営上の工夫を凝らしてはいるが、多くの3年生はついていくのに精いっぱい、割り当てられた仕事を何とかこなしているという状況である。それが、本調査を境に彼らは大きく変わる。

インタビュー時間・場所が突然変更されたり、インタビューにおいて、

こちらの意図が相手にうまく伝わらずかみ合わなかったり、まったく想定外の答えが返ってきたために次の質問に窮したり、もともと調査課題や項目が十分に練られていなかったために予定された時間よりはるかに早くインタビューが終了してしまったり、逆にだらだらと質問し続け大幅に時間延長してしまったり等、彼らにとって予期せぬ問題が次々に生じるものであるが、本調査中は基本的に班ごとの行動になるため、自分たちで何とか乗り切るしかない。相手を目の前にして、どうするのが最善であるのかその場で判断が求められ、そこでは、相手の立場に立って考えることが必要になる。調査だけでなく、集団生活においても同様のことが言え、調査参加者全員のために今何をすべきであるのかを次第に考えることができるようになっていく。

そして後期からは、3年生が主力となってゼミを運営していく。前期に4年生と共にゼミ運営に関わってきた学生が中心となりつつも、3年生全員が何らかの権限と責任を担うことになる。こうした役割分担は、3年生の話し合いで決定される。主体的にゼミを運営することになり、これまであまり発言しなかった学生も、徐々に自信がついてくるのか自らの意見を述べるようになってくる。

## 4.2 課題

こうした目覚ましい成果が見られる一方で、課題もまた存在する。

### 4.2.1 調査受け入れ側との関係に関わる課題

フィールドワークは、調査対象が存在してはじめて成り立つものであり、この22年間常に先方の状況を見極め、双方向的関係の構築に心を砕いてきた。豊かな実践的蓄積を有し、調査対象として非常に魅力的な学校についても、その置かれている状況に鑑みて、数年間調査に入ることを遠慮したこともあった。また、個別の学校に直接調査受け入れを依頼するのではなく、窓口を一本化してはどうかとの提案を受け、2003年度からは稚内市校長会を窓口として調査を依頼する形に変更した。そして今年度からは、既述のように、名古屋大学側の渉外窓口をスタッフに一元化し、稚内市校長会、教頭会、教育委員会、教職員組合に所属するメンバーがチームで受け入れ窓口をご担当くださっている。これは、調査を受け入れる教育現場において今日特に困難である点と、調査を実施する我々の側が抱える課題を率直に出し合い、2012年秋から数度にわたる協議を経て導き出された方策

の一つである。

現地の「ためらい」として我々に伝えられたのは、主として①調査の全体像が見えない、②世話役が不明である、③忙しく十分な対応ができない、④インタビューを申し込まれたが何についてどのような話をすればよいのかわからない、⑤インタビュー項目送付が直前で準備できないという声であった。①及び②については、スタッフの業務負担が増したものの、今年度の渉外方法の変更により、問題はほぼ解決した。しかしながら③については、調査対象に可能な限り負担をかけない方法を考える必要がある、④及び⑤は、調査の「質」に関わる本質的な問題であることから、いずれも調査受け入れ窓口と相談しつつ、引き続き検討していく必要がある。

これまで培ってきたノウハウを活かし、こちらとしては十分な配慮をしているつもりでも、調査対象の置かれている状況や学生の変化によって、新たな問題が生じてくる可能性もある。調査受け入れ側との緊密な信頼関係を維持してこそ、問題を率直に指摘し合えるのであり、それはまさに「批判的友人」関係と言うべきものであろう。

#### 4.2.2 調査の質に関わる課題

調査受け入れ側から指摘された④及び⑤は、本調査に発つまでのゼミ運営のあり方も関わっている。既述のように、本ゼミの他にサブゼミを行い、班毎の活動である分科会もそれぞれかなりの回数開いており、学生は精一杯の努力をしている。10月上旬に本調査を実施していた2003年度までと比較すれば、1か月半早まったことでタイムマネジメントが大変になったのは事実であるが、近年、本調査までの内容上の準備が不足してきていることも否定できない。

これは、班編成が困難になってきていることとも関係している。特に今年は、調査受け入れ側からもトピックスをいくつか提起してもらい、学生の問題意識と併せて検討するという新たな方法を採用入れたこともあり、班の確定が7月中旬にずれ込み、具体的な調査項目の検討に1か月程度しか割くことができなかつた。

ではなぜ、班編成が困難になってきているのか。一つは、問題意識を掘り下げていくことが難しくなっているからである。本稿で具体的に提示したように、宗谷ゼミでは、徹底的に自分の問題意識と向き合うことが求められ、言語化して記述し、それを基に討議し、書き直す、というサイクルでそれを深めていく。それぞれきちんと「宿題」をこなし、話し合い

にも参加する。しかしながら、なかなかまとまっていけないのである。他のグループでの議論を聞いて、「自分はどちらの班でもいいです」という発言が見られる場合もある。柔軟性があるようにも見えるが、我々スタッフは、そうした学生の学問的な「こだわり」が何なのかを探り出そうと、様々な角度から質問するが、すぐに学生は答えに窮してしまう。

数年前からこうした学生が増えてきたように感じていたが、今年度本ゼミにおいて行われた「意見交流会：より深い学びを目指して－活動の見直しを通じた課題の抽出－」<sup>11)</sup>において、学生自身が問題意識を深めることの難しさを次のように語っていた。「何を一番考えたいのかということすらわからず、問題意識を出してくださいと言われ、ものすごく苦労した」、「今となっては、問題意識がすごく重要だとわかってるんですけど、2年のコースゼミでは、発表してレポートを提出しなければならないのでそちらに重点を置いてしまい、その前提となるものを自分でしっかり見つめ直してこなかった」、「3年になっても、結局自分の根っこにあるのは何なんだろうっていう疑問が残っていて、いざみんなの問題意識をすり合わせようって時に困ってしまった」。

出された課題にはまじめに取り組み、一応はこなすが、それは他との兼ね合いによる範囲内での努力であり、さらに深めていくことには慣れていない。とりあえずの形にすることで満足してしまうため、自ら質を厳しく追求しようとはしない、もしくは質的にどのレベルであるのかの判断ができない。これらは、1・2年生を対象とした講義科目をいくつか担当していて近年顕著に感じていることであるが、宗谷ゼミの始動期にも同様の問題が生じてきている。

しかしながら、宗谷ゼミでの1年の活動を通じて、学生は徐々に理解する。「宗谷ゼミは1年を経験して初めて、すごく腑に落ちるっていうか、わかることが多い」と彼ら自身も述べている。このプロセスの持つ意義を最大限に活かすためには、基礎的な学習の充実はもちろんであるが、ゼミに入る前段階である1～2年次の教育課程についても、併せ考えていくことが必要であろう。

## 5. おわりに

苦悩しつつも自らの問題意識に向き合い、仲間と話し合っ共同で課題を設定し、それを解明するための手立てを考え、具体化していく。そして

本調査において、インタビューという手法により様々な対象から直接話を聞き、それらを整理して構造化し、共同論文と言う形で成果をまとめる。こうしたプロセスにおいて、教育学に関わる複合的な内容・方法を実践的に深く学んでいくことのできるフィールドワークの意義について、執筆者自身、今回あらためて確認することができた。調査対象及び調査者側のその時々状況を的確に見据えつつ、より質的に高い教育研究活動を目指し、今後とも努力したいと考えている。

## 注

- 1) 現在は、植田健男教授（1990年着任）と南部（1999年着任）の下、大学院博士後期課程学生5名、前期課程学生5名、4年生7名、研究生3名が教育経営学研究室に所属している。
- 2) 2度にわたる研究会で平間信雄教諭の実践報告を聞いた植田健男助教授が、その実践を実際に見ようと、1992年秋に23名の学生・研修員とともに調査に入ったのが本教育研究活動の最初である。
- 3) 教育学部では3年次より、生涯教育開発、学校教育情報、国際社会文化、心理社会行動、発達教育臨床の5つのコースに分属する。
- 4) この他、大学院での各論ゼミとして、「教育経営学研究Ⅲ・Ⅳ」を置いている。
- 5) 3年次以上を対象とする演習・実習ではあるが、実際には、1～2年生や学部研究生のように単位認定されない学生や大学院学生（「他専攻等履修」により受講）も本教育研究活動に参加している。
- 6) 3年次から本格的に開始される専門的な学習・研究の基礎科目として位置づけられる学校教育情報学講座の必修科目（2年生対象）である。
- 7) この時期、本調査の交通・宿泊手配等、旅行部の業務が本格化し、広報部もまた、ゼミニュースの発行、パンフレットの作成、本調査時の「座談会」の準備等、なすべき仕事が多い。
- 8) 本教育研究活動をよくご存知の稚内市教育相談所長、稚内市校長会長、稚内市教頭会事務局長、宗谷教職員組合委員長がご担当くださっている。
- 9) 河野沙和子、2004、「特別な時間を思って」名古屋大学学園だより編集委員会『学園だより』131: 2。
- 10) 学校教育情報コースでは、3年次の年度末に関心のあるテーマや研究領域、指導を希望する教員等について、書面による調査を行い、それをもとに指導教員を決定している。
- 11) 2014年1月17日に開催した。